表紙モノ語り

戦士の頭を象った壺

国名：ペルー共和国　1976年受入
標本番号：H0005790

関雄二
民博 研究戦略センター

南米の古代アンデス文明は、山岳地帯のインカが有名だが、そのインカを遡ること一五〇〇年も前に、モチェとよばれるアンデス文明史上最初の国家が興った。西暦紀元後から六〇〇年ころまで、今日のペルー北海岸で栄え、日干しレンガを積んで巨大な神殿を築いた。

建築とともにモチェで有名なのが、表紙でとりあげたような、クリーム地に赤色顔料で文様を描いた土器である。農耕、漁労、機織り、狩猟などの日常的な題材のなかにも、神話的存在が登場することもあり、古くから、写実的な図像なのか、それとも観念世界を表現しているのか、議論の的となってきた。表紙写真のように頭飾りから戦士とわかる像や戦闘場面も数多い題材のひとつだが、実際の戦闘の証拠はほとんど見つかってこなかった。

ところが近年、モチェの中核的な神殿より、戦士にかかわる人身供犠の痕跡が発見されたのである。骨はバラバラにされ、足のスネには拷問でいたぶられた跡が残り、のど仏あたりの頸骨には、放血用の切断痕が確認されている。しかも骨は、がっしりとして、骨折が治癒した跡もあった。戦闘のように常に暴力的な行為に従事していた人物、すなわち戦士の末路と考えられるのである。以前から、こうした戦闘捕虜の人身供犠をあらわした土器が報告されていたので、考古学的証拠が、戦闘や儀礼の存在を裏付けたことになる。

しかし土器に描かれる戦闘場面は歩兵による集団戦ではなく、一対一で描かれ、また戦闘従事者の衣装や武具が似ている点からすれば、エリート同士の戦闘であったと考えたほうがよさそうだ。人物象形土器は、これら戦士の肖像なのであろう。さらに同一人物の肖像でも、立派な戦士に成長し、やがて捕虜となり、裸体に縄を打たれる最後の姿までを一連の土器で表現した例もある。モチェ的武士道とは何か。おもしろい研究テーマかもしれない。